



復元された飯場

加害の歴史を問いなおす

丹波マンガン記念館を訪ねて

かつて朝鮮から強制連行された人々や、被差別部落の人たちが働いた鉱山跡を復元して、その歴史を伝える施設、丹波マンガン記念館（京都市右京区）を訪ねました。

マンガンとは

鉄製品を作るとき、明治時代以前では、中国山地などを中心に盛んに行われた鉄穴流し（※）によって採取された、砂鉄を材料にしたたたらによって鉄を得ました。そしてその鉄によって、日本刀や火縄銃や大砲が作られていました。

明治以降、日本の近代化の中で鉄に対する需要は飛躍的に伸びました。それまでの山砂鉄や浜砂鉄などに頼るだけではとうてい不足し、洋式溶鉱炉を使用した新しい製鉄業が起こつてきました。

ところが鉄鉱石にはほとんどマンガンが含まれておらず、鉄が柔らかくて銃や大砲などがそ

の役目を果たせませんでした。鉄にマンガンを混ぜる必要があったのです。鉄とマンガンと一緒にすることによって硬い強い鉄製品が作られることになりました。

丹波地方のマンガン鉱山

京都丹波地方は、全国でも数少ない貴重なマンガン鉱山が集中して存在する地方でした。丹波山系では、1895年ごろから約90年間ほど、約500の鉱山床があり、300カ所もの鉱山が活況を呈していました。しかし各々の鉱山は規模が小さく、大手鉱山会社が出さない零細企業でした。

劣悪な労働環境の中で

これらの鉱山で採掘や運搬を担ったのは、多くの朝鮮人と被差別部落の人々でした。戦争中は大砲などに使用する鋼鉄の材料を確保する必要から、一部の

鉱山では強制連行された朝鮮の人たちが狭い飯場に寝泊りしながら作業を強要されました。

狭い坑道の中で、マンガンの母岩であるチャートを爆破するときに出る粉じんを吸い込むことにより、ほとんどの人たちがじん肺という病気に侵されました。

丹波マンガン記念館の願い

初代館長の李貞鎬さんは、かつて自分が働いたこの鉱山での強制連行の歴史を永久に保存し残そうと私財を投じて「丹波マンガン記念館」を作られました。

私たちは、記念館や飯場、坑道跡などを見学・研修する中で、加害の歴史を問いなおし、お互いの歴史や文化を正しく理解しあい、平和と友好を構築する場として、一見する価値のある記念館であると思いました。

(※) 鉄穴流し
山を崩した土砂を人工の水路に流し、沈殿した砂鉄を採取する

丹波マンガン記念館
〒601-0533
京都市右京区京北下中町西大谷45番地
☎0771-54-0046